

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 27日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720010

研究課題名（和文） アンリ現象学に依拠した悪の問題の解明

研究課題名（英文） Clarification of the Problem of Evil on the Basis of Henry's Phenomenology

## 研究代表者

伊原木 大祐（IBARAGI DAISUKE）

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30511654

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代フランスの哲学者ミシェル・アンリが確立した生の現象学に依拠しつつ、神学・哲学上の「悪の問題」を解明することに取り組んだ。その結果、アンリ思想自体の背景にあるグノーシス的二元論の重要性を確認することができた。さらには、このアンリ思想を悪に関する前期レヴィナスの議論に対置して検討したが、そのことによって今度は両者の現象学思想を救済論的かつ異端的な観点から捉えることが可能となった。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted to clarify the theological and philosophical problem of evil while depending on the phenomenology of life, established by French philosopher Michel Henry. As a result, we confirmed the important role of Gnostic dualism lying in the background of Henry's thought. Furthermore, we weighed this thought with E. Levinas's early account of evil, which enabled us to grasp the phenomenological thoughts of Henry and Levinas from a soteriological and heretical point of view.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：現象学、宗教哲学、フランス哲学、身体論、キリスト教神学

## 1. 研究開始当初の背景

（1）本研究代表者は、これまで現代フランス現象学に関する一貫した研究を進めてきた。ここで言われる「現代フランス現象学」とは、フッサール以来の伝統的な現象学と違い、より宗教的な要素（ユダヤ・キリスト教的な諸観念）を加味して成り立った現象学の新しい潮流である。その中心的な哲学者として、エマニュエル・レヴィナスとミシェル・

アンリの名を挙げることができる。彼らの生命・身体観の研究に従事する過程で突き当たった課題が、「悪の問題」である。現代フランス現象学の思考法に顕著な特徴の一つとして、身体行為の能動性よりも、むしろ身体感情の受動性に注目するという側面がある。中でも苦しみの受動性は、レヴィナスとアンリが共に思想の軸としていた特権的な現象であり、これはいわゆる「被られた悪（mal

subi)」という、悪の受動的側面に繋がってゆくものである。他方で、レヴィナスとアンリが、悪の能動的側面とも称しうる現代の「行われた悪 (mal agi)」に対しても鋭い分析を加えていたという事実には、特記すべき思想的重要性が認められる。

(2) 広大な対象領域である「悪の問題」に関しては、過去にいくつもの重要な著作が残されているが、現在でもなお継続的な省察がなされているとは言いがたい。重要な哲学的古典としてプラトン、アウグスティヌス、カント、シェリング、キルケゴールの諸著作を挙げることができるが、とりわけ20世紀のフランス哲学界においては、ラヴェル、ナベール、リクール、ポレーらが興味深い悪論を展開している。これらの遺産を踏まえつつも、新たにミシェル・アンリによる「生の現象学」の方向から悪の問題に取り組むことで、当該現象に対する理解をこれまで以上に深化させることができるのではないか。以上が、本研究開始時点における学術的背景である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主たる目的は、ミシェル・アンリの思考に依拠しつつ、古代より哲学・神学・倫理学の諸思想によって多様な仕方で論じられてきた「悪の問題」に対して新たな解明の光を当てる点にある。アンリが提唱した「生の現象学」の構想を導きの糸としながら、とりわけその身体に関する現象学的分析を参照することにより、この問題に対する従来のアプローチとは異なる方向を打ち出すことが目指される。

(2) 具体的にはまず、ミシェル・アンリの思想において、初期から晩年まで一貫して見られる「性」と「身体」のテーマ系を中心的な座標軸としつつ、その「生の現象学」という哲学的企図を再考することで、既存のアンリ研究に対する寄与を狙う。また、このようにして獲得されたアンリ現象学の哲学的立脚点に依拠するならば、「悪の問題」はいかに捉え直されるのかを提示する。同時に、現代フランスの他の哲学者たちによる悪論との関連を検討する。

## 3. 研究の方法

(1) ミシェル・アンリ思想の基本線は、いかなる外的な表象とも混同できない徹底した感情的内在性のうちに生の本質を看取し、それによって世界の諸現象を基礎づけようとする試みにあったと言える。アンリの文明社会論『野蛮』や、後期のキリスト教論『我は真理なり』では、このような生の内在が自らを否定し、自らを消し去ってしまうような外部の空虚に悪の発生根拠を見ている。実は、

こうした思考法は、アンリ独自の身体論と密接に関連していると考えられる。晩年のアンリによる身体論は、外的物体としての「身体 (corps)」と、生ける主観の能力としての「肉 (chair)」とを厳密に区別し、ついに後者の概念を生の内存在と同一視するに至った

(『受肉——肉の哲学』)。そこでの問題構成を「他者身体の把握」という古典的な現象学的課題に当てはめたとき、今度は新たに、セクシュアリテの問いが提起されてくる。アンリの分析によれば、他者との性的関係においては、当の他者の「肉」へと直接到達することができず、むしろ客観的な「物体=身体」の現われを志向せざるをえないという。アンリはそのような客観的对象との関係性に、生が不在化してしまう即物的暴力の可能性を見いだしている。

(2) 2010年度は、アンリに即して悪の問題を論じるための準備段階として、アンリ思想の総体を「性」と「身体」という観点から読み直した。比較的初期に書かれたメーヌ・ド・ピラン論『身体哲学と現象学』の時期から、アンリはすでにセクシュアリテの問題を他者身体の把握の問題と結び付けており、こうした独特の議論が完成形となって現われたのが『受肉』という晩年の著作である。当該年度は、その中間点に位置する『精神分析の系譜』の解釈を中心に、精神分析との対決からアンリ現象学による性の問題へのアプローチを浮き彫りにするという方法が取られた。

(3) アンリが実際に著作の中で悪を論じる際には次の二つの位相があり、それらは相互に緊密な関係を保っている。一方で、アンリ現象学の応用編とも言うべき文明批評・社会批評(『マルクス』・『野蛮』など)において、現代文明に固有の悪についての詳細な分析が実行されている。他方で、アンリ現象学の発展版であり、その最終形態とも言うべき後期のキリスト教論(『我は真理なり』・『受肉』・『キリストの言葉』など)では、古代神学の論争を現象学的視点から再構築するという手法によって悪の問題が俎上に載せられている。このような《文明論的な悪論》と《キリスト教的な悪論》は、アンリの名著『現出の本質』の中で詳細に解明された同じ一つの存在論的根拠から発するものである以上、切り離して論じることはできない。そのような一体性を強く意識しながら、アンリ現象学による悪の分析を考察し、この中から現代的悪論の類型を引き出すというのが、2011年度に採用された方法である。アンリは生の構造そのものの中に悪の発生源を見ているようだが、そのことはまた、悪の問題に対する一定の解決がやはりこの内在的かつ情感

的な生の中においてしか可能でないことを示唆している。

(4) 最終年度に当たる2012年度は、現代フランス哲学における他の悪論の動向を見据えながら、アンリ現象学に基づく悪論の意義を再考した。20世紀フランスの道德哲学を主導した哲学者たち、とりわけラヴェルやル・セヌ、ナベル、リクールといった人々は、概してカント主義的な立場から出発して悪の問題を論じることが多く、そこでは身体および生命に関する一貫した視点からの省察がほとんど見られなかった。この事実に着目するならば、アンリ現象学による悪の分析をオリジナルなものとして理解することができる。とりわけ前期レヴィナスによる悪、身体、性の問題と比較することによって、さらにはそれと一定の関係を有しているジョルジュ・バタイユの思想を一部検討の対象とすることによって、アンリ悪論の独自性を際立たせるという方法が用いられた。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究の初年度においては、性的身体概念を中心にアンリ思想を捉えることに専念した。この論点に関するアンリの思考はきわめて独創的であるにもかかわらず、これまでの研究史の中で十分に論じ尽くされたテーマであるとは言えないため、この作業にもそれなりの学術的意義があったものと考えられる。

①『精神分析の系譜』の読解を中心に、アンリの自己触発論をフロイト精神分析における欲動の内因的刺激的議論に重ね合わせることで、「性」の問題へとアプローチするための理論的な道筋を作ることができた。

②晩年の著作『受肉』の第二部において現れる「肉のコギト」もしくは「キリスト教的コギト」の概念を明確化することによって、アンリ身体論を古代教父神学との関係の中で捉えることに成功した。

③初期のビラン論『身体の哲学と現象学』と『受肉』との関連を重視しつつ、セクシュアリテやエロスの問題に対してアンリがどのような哲学的把握を行っているのかを検討することとなった。この三つ目の作業にあたっては、今年度になってようやく公開された1940年代から50年代にかけてのアンリの草稿群（「他者経験についてのメモ」）を利用することにより、研究が大きく進展した。

(2) 研究時期の中間に位置する2011年度においては、アンリ的な「生の現象学」構想に依拠しつつ、そのキリスト論的な視点と文化論的な視点とが交差する地点から、本格的に「悪の問題」を考察した。具体的には、前年度の成果（論文「生の自己刺激——アン

リのフロイト読解をめぐる」）に基づいて、初期から晩年まで一貫しているアンリ身体論の「性（セクシュアリテ）」に関する言説を徹底して分析し、それが『野蛮』以降で展開されるアンリの現代文明批判とどのように関わっているかを示すことで、悪の問題の解明に向けてさらなる前進を果たすことができた。また、前年度に考慮の対象となった古代キリスト教の身体論と結びつけることで、アンリ思想の宗教哲学的側面にも光を当てることができた。

①一部公表されたばかりの初期草稿を参照しながら、主にアンリ晩年の著作『受肉』で展開される「エロスの関係」の現象学的身体分析を取り上げ、このテーマに関する総合的な考察を行った。その結果、アンリ思想においては悪の問題が世界における脱自的客観化の機構と深く連関することが明らかとなった。

②アンリ現象学による性的身体へのアプローチが特異なものであることを強調するため、レヴィナスが『全体性と無限』で提示した「エロスの現象学」を比較参照しつつ、両者の異同を明確にする作業を行った。これについては、日本現象学会におけるワークショップ内で「愛撫と官能」と題する発表を実施した。

(3) 最終年度の研究では、これまでに得られた研究成果をもとに、次期の研究課題にうまく繋がってゆくような発展的成果が得られた。中でも、「生の現象学」思想の背景にある神学的発想の残滓を精査することによって、そもそもこの方法論に依拠した「悪の問題」に対するアプローチ自体がきわめてグノーシス的な二元論の様相を帯びざるをえないという点を確認できたことは、本研究全体から引き出すことのできる大きな成果の一つである。この点を積極的に打ち出したフランス現象学研究は国内外を見渡しても少ないように思われる。具体的には、以下のような成果となって現れた。

①研究代表者がこれまでに蓄積してきたレヴィナス研究を活用しながら、それとアンリ現象学との関連を、いわゆる「神学的転回」（ドミニク・ジャンコー）とはまったく違う宗教哲学的な枠組みのもとに捉え返す試みが企てられた（論文「レヴィナス、アンリ、反宇宙的二元論」）。この論文を通して、レヴィナス、アンリという二人の現象学者に共通して見られる異端的側面においては、まさしく「悪」および「救済」の概念が枢要な役割を果たしている点を論証することができた。

②悪の問題に対する比較思想的な視野を広げる目的から、前年度末よりアンリ研究と並行して、ジョルジュ・バタイユの内的経験論を元にした悪論の研究に着手してきた。こ

れに伴い、レヴィナスおよびバタイユの並行的解釈を展開したものが、「存在と情動——レヴィナスからバタイユへ」と題する成果発表である。本発表のフルバージョンは、次年度に「実存の眩暈」と題した論考として刊行される予定である。また、この作業によって、アンリ思想との間にレヴィナスを介在させて複数の思想家たちを考慮するという方向へと研究を推し進めることができた。その過程で、あらためて 20 世紀フランス哲学におけるグノーシス的二元論のテーマ系を精査する必要が生じてきた。これについては、今後の研究課題として取り組むべきであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①伊原木大祐、「レヴィナス、アンリ、反宇宙的二元論」、『宗教哲学研究』、査読無、No. 30、2013 年、53—68 頁

②伊原木大祐、「生の自己刺激——アンリのフロイト読解をめぐる」、『ミシェル・アンリ研究』、査読有、1 号、2011 年、39—57 頁

③伊原木大祐、「Fraternité humaine et responsabilité dans Totalité et Infini」、『基盤教育センター紀要』、査読無、No. 10、2011 年、1—14 頁

[学会発表] (計 3 件)

①伊原木大祐、「存在と情動——レヴィナスからバタイユへ」、日本宗教学会、2012 年 9 月 8 日、皇學館大学

②小手川正二郎、檜垣立哉、伊原木大祐、関根小織、「ワークショップ レヴィナス『全体性と無限』とエロスの現象学：『全体性と無限』刊行五〇周年を記念して」、日本現象学会、2011 年 11 月 6 日、立命館大学

③伊原木大祐、「肉の現象学におけるキリスト教的コギト」、日本宗教学会、2010 年 9 月 5 日、東洋大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

伊原木 大祐 (IBARAGI DAISUKE)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30511654

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：